

文化財 ニュース

7 Winter 2015

■平成26年度 文化財特別展 「千代田の坂と橋—江戸・東京の地形—」 開催特集号

会期：平成27年1月30日(金)～3月22日(日)

※2月16日(月)と3月16日(月)は休館日

時間：10:00～18:00

(日・祝は10:00～17:00)

会場：1階特別展示室(観覧無料)



「東京神田筋違目鑑橋創築繁栄之図」明治6年
作者：四代豊国 版元：大金
(個人蔵：展示予定)

千代田区は、旧江戸城を境として西に台地、東に低地が存在し、今でも江戸時代以来の道筋には、由緒のある「坂」があり、河川や堀割には歴史ある「橋」が残ります。いうなれば「坂と橋」は、千代田区の地理的・歴史的特質を示すものです。

平成26年度特別展では、区内に残る坂と橋にスポットをあて、「江戸・東京」の歴史を紐解きます。普段になく歩く街並みには、近世以降の文化遺産が数多く残り、現代の街並みがこうした歴史の積み重ねによって形作られていることがわかります。これを機会に、ぜひ自分たちが住み、働く土地の歴史を知るきっかけにいただければ幸いです。(後藤)

Index

- 2 **特集** 平成26年度文化財特別展
「千代田の坂と橋—江戸・東京の地形—」
- 4 **収蔵庫から** 見立番付にみる千代田の坂と橋
- 6 **千代田の年中行事** 初午
- 7 **埋文ニュース** 法政大学構内遺跡の発掘調査
- 8 **子ども体験教室開催報告**
厚紙で鏡をつくろう！

●展示解説

以下の日程で、担当学芸員が展示解説を行います。時間になりましたら、1階特別展示室の入口付近にお集まりください。(所要時間：約40分程度・予約不要)

- 2月4日(水) 14:00～
- 2月12日(木) 17:00～
- 2月19日(木) 17:00～
- 3月5日(木) 17:00～
- 3月17日(火) 14:00～

「千代田の坂と橋 —江戸・東京の地形—」

このコーナーでは、平成 26 年度文化財特別展「千代田の坂と橋—江戸・東京の地形—」の見どころを紹介します。

I. 江戸名所としての坂と橋

太田道灌の築いた江戸城は、低地を望む高台に城を築き、河川や海辺を背景に舟運が盛んな地域でした。その後、徳川家康が入国した江戸は、武蔵野台地東端から沖積地に展開し、江戸湾や河川を利用した物流を促し、政権都市のみならず、我が国の経済の中心地ともなった巨大都市となりました。

起伏に富んだ江戸の町は、「名所江戸百景」にみられるように、坂や堀・橋など江戸に点在する地形や自然を名所として描いていました。

この錦絵には、全 118 点の作品のうち、坂など起伏を描いたもののほかに、堀や河川、江戸湾、橋など水辺を描いたものなどが含まれます。刊行の開始が安政 2 年（1855）の大地震の翌年であるため、この頃はまだ破壊された町並みであり、これらの風景は、復興祈願という意味合いもあったと思われます。

本展示の導入として、この錦絵をもとに千代田区の原風景・坂と橋を紐解くこととします。（後藤）

III. 祭礼にみる坂と橋

千代田区には山王祭と神田祭という、隔年で行われる 2 つの大きな祭礼がありますが、この祭礼行列の巡行にも坂と橋は切っても切れない関係にあります。

江戸時代はともに江戸城に入城して将軍の上覧に供する別格の待遇を受け、「天下祭」と呼ばれた両祭礼では、神社の出す神輿のほかに、氏子町が仕立てた山車や附祭つけまつりなどがあって、非常に長い行列となります。

そして、これらは江戸城内堀や外堀の各所に設けられている城門（見附）や橋を何度もくぐるわけです。なかでも上覧所を目前に控えた場所、すなわち山王祭では半蔵門、神田祭では田安門が祭礼で最も盛り上がる場面でした。

また、巡行路もけっして平坦なわけではなく、坂の場面で山車などを上手に巡行させるには、かなりのテクニックが必要だったようです。

このコーナーでは、そのような祭礼と地形との関係を錦絵などから読み解いていきます。（滝口）

II. 千代田区の地形のなりたち

もともとの江戸城の地形は、武蔵野台地東端に位置し、眼下には日比谷入江が、その先には江戸前島と呼ばれる砂洲さすが広がっていました。徳川家康入城直後に道三堀を開削して江戸城内堀にある和田倉に幕府の蔵を置いて海と川を結ぶ舟運を開き、その後、慶長 8 年（1603）に江戸に幕府を開くと、本格的な江戸城築城を始め、寛永 13 年の江戸城外堀普請に至る約 30 年をかけて江戸城および城下町の整備を行いました。こうして、日比谷入江をはじめとした海浜が埋め立てられ、度々城下の水害をもたらした河川は、江戸城内堀や外堀をはじめとした堀割に造り替えられていきました。

ここでは、遺跡発掘調査などで明らかとなった千代田区の原地形を示し、地形の起伏を利用して、原始・古代から生活の舞台となっていたことを捉え、江戸時代の城下町の町割によって移りゆく地形を示します。（後藤）



歌川広重「名所江戸百景 糺町一丁目山王祭」
安政 3 年（1856）7 月 魚屋栄吉版
望月義也氏所蔵

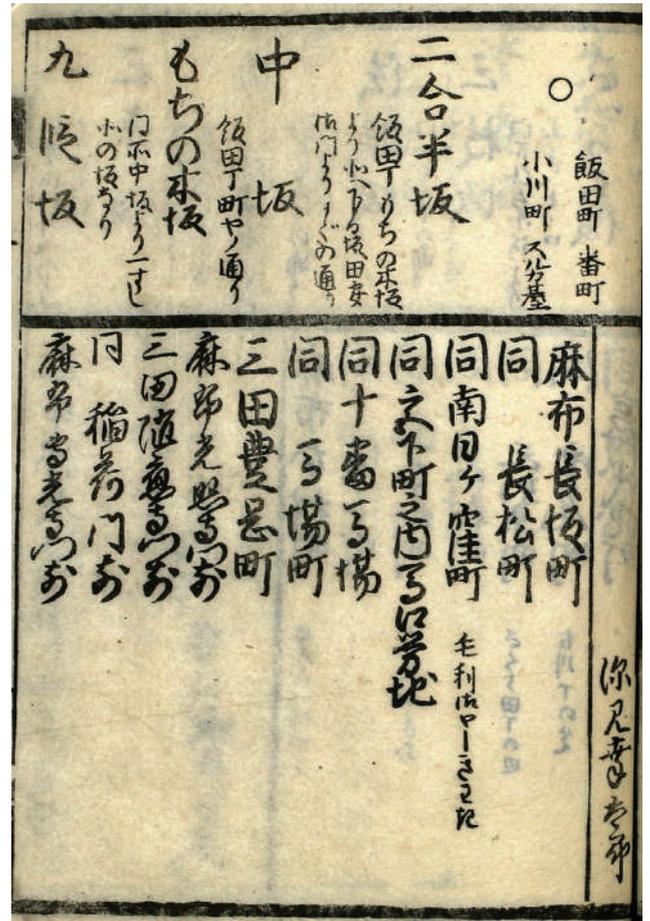
IV. 江戸の坂

千代田区は坂のない低地部分と、坂の多い高台の連なる部分という2つの地域に分けることができます。この特徴は、旧江戸城である皇居を歩いてみても、例えば東御苑と北の丸とでは、かなりの高低差があることを実感できるはずです。

このような地形的な違いは、天正18年(1590)に徳川家康が入国した際に台地だった地域と、その後の開発によって浅瀬を埋め立てて形成された地域という地誌的な由緒に表れています。

千代田区域はそれゆえ、武家屋敷の多い山の手と、町人地の多い下町という住民構成の縮図でもあり、武家屋敷が多かった永田町・番町・駿河台などは現在も坂の多い土地として、坂が地域の風景を象徴するもののひとつとなっています。

ここではこうした区内の坂の歴史を垣間見ていきたいと思います。(滝口)



『万世江戸町鑑』下 天保2年(1831)刊
英屋平吉版 千代田区教育委員会蔵

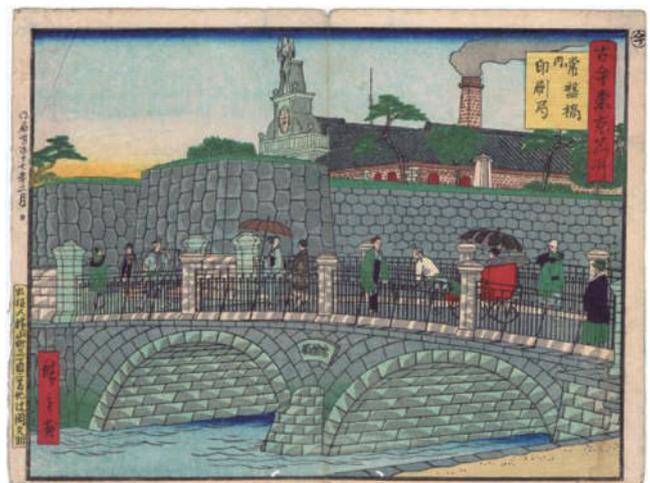
V. 江戸・東京の「橋」

江戸城築城を契機として都市開発が行われ、河川を改修して江戸城内堀を起点として、外堀・神田川に至る堀が造られ、城や城下の防御としていました。この堀は、軍事目的であるため、堀を渡る橋は桁形門という石垣で囲まれた城門となっていました。

また、堀や河川には多くの河岸や蔵が設けられて水運の拠点となり、堀と街道の交差する橋は、街道の起点となり、橋詰広場が設けられて人々が集まり、情報が行き交う活気ある空間となっていました。

明治時代以降は輸送手段が水運から徐々に陸路へ推移したものの、水際に建つ建築は水面に溶け込むファサードを保ち、関東大震災後の復興橋梁は、それまでの地域特性を踏まえた個性ある橋が継承され、橋を中心とした豊かな景観が引き継がれてきました。

ここでは、江戸城門から近代橋梁へ至る歴史と「橋にみる近代史」と題して、万世橋周辺の橋梁や鉄道高架橋を取り上げて、近世から近代への歴史の継承を考えます。(後藤)



三代歌川広重「古今東京名所 常盤橋印刷局」
明治17年(1884)2月 辻岡文助版 個人蔵

見立番付にみる千代田の坂と橋

今回ご紹介する資料は、現在開催中の特別展「千代田の坂と橋」に出展している見立番付「橋坂渡シ案内」です。(滝口)

現在、大相撲は年6回本場所が開催されますが、そのつど作成されるのが、番付です。相撲の番付は江戸時代後期にはすでに木版摺で刊行されていましたが、ほどなくして、これにならってさまざまなものを格付けする、見立番付も刊行されるようになりました。現代風にいえば、「なんでもランキング」といったところで、物事をランキング表示することが好きな日本人の特性を表していますが、今回ご紹介する見立番付「橋坂渡シ案内」(5頁参照)は、江戸の坂と橋をランキングしたものです。

ここでは、「東の方」に橋を、「西の方」に坂を配し、それぞれ5段に構成されています。また、真ん中の柱には「花の御江戸四里四方道案内の為、橋と坂角力に取組入御覧候間、初日より御求可被下候」とあって、坂と橋を相撲に見立てた旨を示し、その下には渡し場を挙げ、「橋坂渡シ案内」たるゆえんを示していますが、こちらは数が少ないこともあり、あくまで脇役扱いです。そして一番下に世話役・勸進元・差添と、いかにも相撲を模した体裁になっています。

ただし、ランクの上下にはさほど脈絡があるわけではないので、さしずめ「勝手にランキング」といったところでしょうが、それでもある程度の当時の江戸人の認識を垣間見ることはできそうです。

さっそく千代田区域についてみていくと、まず世話役に霞が関、欄外に山王坂がみえます。霞ヶ関は古代から東国の名所として知られ、江戸時代後期には福岡藩黒田家(47万3000石余)と広島藩浅野家(42万6000石余)という外様大藩の上屋敷が霞ヶ関坂の両側にあって、しかも坂の上からは東側の町々や遠く江戸湾がのぞめる景勝地でもありました。また、山王坂は山王権現(現日枝神社)門前を通る比較的急な坂で、どちらも別格の扱いをされています。

次に橋についてみていくと、大関に日本橋、関脇に両国橋という、いわば江戸のシンボリック的存在に続いて、小結に「本丁 常盤橋」とあります。常盤橋は江戸の町人地のなかでも中樞である本町と、江戸の城門(見附)のひとつである常盤橋門をつなぐ橋で、町人世界の側からの表記であるがゆえに「本丁(町)」と記載されているのでしょう。この橋が上位にラン

クインしているのは、常盤橋が外堀に架かる橋であり、外堀によって大名屋敷の建ち並ぶ城門内の世界と、町年寄の屋敷や金座を有する町人世界の代表的な地域とを結ぶ役割を果たしているからかもしれません。

このようにみていくと、前頭の呉服橋も同様と考えられ、他にも番付には外堀・内堀に設置された城門の橋が少なくありません。

なお、千代田区内では、他にも神田橋・銭亀(瓶)橋・昌平橋・雉子橋・弁慶橋・今川橋・鍛冶橋・水道橋・一ツ橋・竜閑橋・和泉橋・新らし橋・筋違橋・道三橋などがみえます。

一方、坂では関脇に九段坂、前頭に三部坂がみえます。九段坂は俎板橋から田安門にかけて内堀沿いを上って行く坂で、その一筋北側には元飯田町の町人地を通る中坂があって、ともに急坂で知られていました。また、三部坂は永田町の和泉岸和田藩岡部家(5万3000石)・武蔵岡部落安部家(2万2000石余)・和泉伯太藩渡辺家(1万3500石)の3家の上屋敷に接することに由来し、その独特の由緒から上位になったと考えられます。

坂の方は勾配が急であるとか、坂上からの見晴らしがよい、あるいは坂の由来に特徴があるといったところから取り上げられている傾向がうかがえます。

千代田区では明神坂・昌平坂・中坂・貝坂・紀尾井坂・五段坂・念仏坂・三枝坂・三年坂・小栗坂・勸学坂・冬青木坂・五味坂・三宅坂・二合半坂といった名称が挙げられています。

江戸の坂や橋は多くの地誌に紹介され、錦絵の画題となり、さらには江戸城を中心として十二方角ごとに名所旧跡を簡潔に紹介した「江戸方角」が手習いの教科書として江戸の子どもたちにも馴染み深いものだったことを考えれば、こうした見立番付が紹介する江戸の坂や橋は、当時の江戸の人々にとって共感できるものだったことでしょう。

明治・大正・昭和・平成と、その後の都市計画や区画整理の進行によって、坂や橋も消滅したものの、新たに誕生したものとさまざまですが、この1枚の見立番付は、坂や橋へ向けられた江戸人の感覚を現代に伝えてくれる貴重な資料となっています。



東 方 の 西 方

備 前 備 中 備 後

大関	小関								
牛込	飯田	市谷	湯島	市谷	湯島	市谷	湯島	市谷	湯島
神楽坂	大塚								
三軒茶屋	目黒								
豊島									
板橋									
三軒茶屋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									
板橋									

大関	小関	大関	小関	大関	小関	大関	小関	大関	小関
通国	日本								
四日市	竹町	通	御殿	下谷	神田	呉服	木挽	木挽	木挽
新大塚	大塚								
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚
大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚	大塚

橋坂渡案内

水さき 永田 山王 大つ 荒場 大つ 泉

行 橋 渡 世 霞 代 橋 勧進元 湯嶋切通



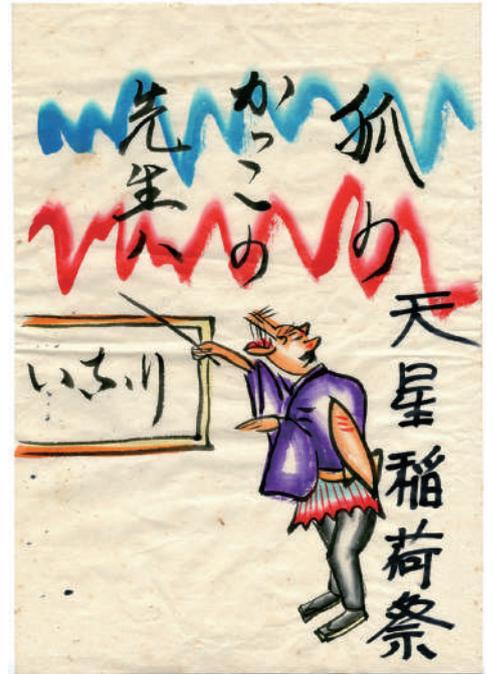
このコーナーでは、当区教育委員会が所蔵する資料や文化財事務室が行った調査成果をもとに、千代田区域の年中行事を紹介していきます。(加藤)

2月の初午の日が近づくと、町内の掲示板などで「初午祭」のお知らせを目にするようになります。千代田区内でも、この初午の時期に合わせて、「初午祭」や「例大祭」などといった稲荷のまつりを行う稲荷社が多くあります。

これは、稲荷のまつりを初午の日に行うという風習によるもので、『東都歳事記』「初午」の項には「江戸中稲荷祭、前日より賑へり 江府は、すべて稲荷勧請の社夥しく、武家は屋敷毎に鎮守の社あり。市中には一町に三五社勧請せざる事なし。寺社の境内に安ずる所は、神楽を奏し幣帛をささげ、市中にも桃燈行燈をともし、五彩の幟等建つらね、神前には供物燈火をささげ、修験禰宜を請て法楽す。又男兒祠前に集りて、終夜鼓吹す。」とあり、当時の賑やかな初午の様子が挿絵とともに記されています。

この記述によれば、江戸の初午祭は、行燈や五色の幟で市中の稲荷を飾り付け、子ども大人に限らず初午の前日から、夜通し賑わっていたことがわかります。さらに夕暮れ以降の暗闇を、点々とおかれた行燈が照らしたのでしょう。この行燈は、江戸では、地口行燈と呼ばれるものです。地口とは駄洒落文句のことで、この行燈には、ひょうきんな絵と地口が

書かれているのが特徴です。地口には「案じるよりふむがやすい」や「ざるも木から落ちる」などの文句が書かれました。地口行燈は、初午祭の宵宮を照らした照明器具であるとともに、まつりを盛り上げる必須アイテムであったことがうかがえます。

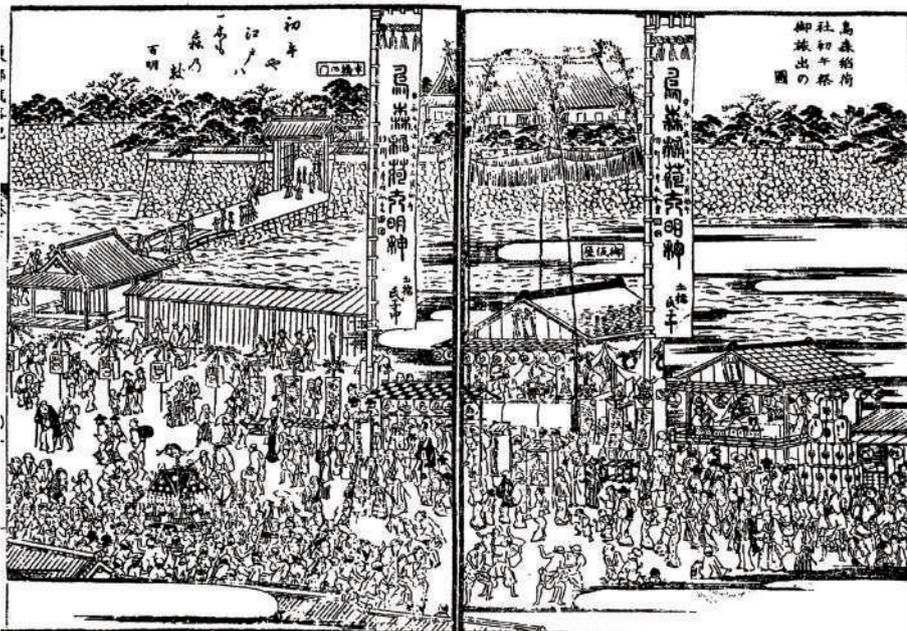


地口行燈の地口

現在、千代田区域でも多くの稲荷が祀られており、初午近くや旧暦の初午などに地域の稲荷をまつる「初午祭」や「例大祭」が行われています。そのまつりは、必ずしも暦通りの初午の日とは限らず、平日あるいは

土日によらずに行われる場合もあります。それぞれの稲荷をまつる町会や保存会の人々が、より参加しやすい日を選びながら信仰が継続されてきました。

江戸時代のように子どもも大人も夜通して稲荷のまつりを祝うという光景は見られなくなりましたが、現在でも地口行燈を飾ったり、より多くの人々が参加できるように配慮したりして、現在でも稲荷のまつり「初午」を過ごしていることがわかります。



『東都歳事記』(初午)

天保9年(1838)

法政大学構内遺跡の発掘調査



寛永13年(1636)には江戸の一大事業とされる外堀普請^{ふしん}が行われました。今回の調査ではその外堀普請によって掘り出された砂を利用した4mにわたる盛土が検出されました。(小杉)

発掘調査の概要

法政大学市ヶ谷キャンパス55・58年館建替工事に伴い、平成26年5月12日から7月26日にかけて法政大学構内(No.65)遺跡の発掘調査が行われました。

今回の調査では、江戸時代を中心に縄文時代から近代までの遺構・遺物が発見され、遺構は約480基が検出され、遺物は収納箱にして約100箱分が出土しました。

地理的・歴史的環境

千代田区の地形は武蔵野台地東縁に位置し、台地部分(山の手台地)と低地部分(下町低地)に大きく分けられ、調査地は淀橋台に位置しています。淀橋台は旧河川による浸食作用で多くの谷が枝状に発達し、坂や崖の多い起伏に富んだ地形となっています。

本調査地点は神田川支流の谷に面した斜面地上に立地しており、今までの調査や地質調査の成果により、かなり傾斜の激しい地域であったことが分かっています。

江戸時代の調査地一帯は「番町」に属しており、旗本屋敷が江戸初期から幕末まで継続していたことが分かっています。この番町は家康入府にあたり大番組に所属する番士の屋敷地として成立しました。

江戸時代における今回の調査地点は「御符内沿革図書」によると、延宝～元禄9年(1673～1696)頃は、旗本岡部氏と水野氏の屋敷境^{さかい}に位置します。その後、屋敷の割替えがあり、宝永8年(1711)には、

岡部氏・中山氏・塚原氏となり、寛政4年(1792)には寛氏^{かへい}・千村氏・石丸氏、天保6年(1835)では織田氏^{ちむら}・千村氏・坂部氏と変遷します。

発掘調査の成果

縄文時代の住居跡は検出されませんでした。前期の土器を中心に中期や後期の土器、打製石斧などが出土しており、周辺地域に縄文時代の集落があった可能性があります。

江戸時代および近代では道路跡、建物などの礎石、溝、穴蔵、ゴミ穴などの遺構群が検出され、遺物としては陶磁器の茶碗や皿、徳利などの生活道具のほか、当時の食生活を窺わせる魚骨や貝などが発見され、「番町」に住んでいた旗本の生活の一端を示す資料となりました。

近世の成果で特筆すべきは、外堀普請により掘り出された砂を盛土し、場所によっては4mにおよぶ盛土造成^{そうせい}が行われていたことです。砂盛土の下層はヘド口状をした黒色土の盛土で、江戸城外堀^{さら}の堀浚いによって発生した土砂を利用していると考えられます。

寛永13年(1636)には、江戸の一大事業とされる外堀普請が行われ、その掘削の際にでた砂を利用し、斜面部の埋め立てや屋敷地の造成など自然地形の改変が行われたと推定できます。砂による盛土の例は少なく、幕府が未開発地を造成し、武家に屋敷地を与える江戸時代初期の幕府の造成事業の一端を考えるうえで貴重な調査となりました。



遺跡調査全景



出土遺物(江戸時代)

子ども体験教室「厚紙で^{よろい}鎧をつくろう！」

夏休みも終わりに近づく平成26年8月23日、ちよだパークサイドプラザで厚紙を使った「鎧づくり」を開催しました。

鎧というと、鎌倉時代の武士の着用した大鎧を思い浮かべる方が多いかもしれません。けれども、それまでの戦の方法が大きく変わった戦国時代、合戦の主役は、槍^{やり}などを持って戦場を駆け巡った足軽^{あしがる}（雑兵）でした。今回は、埼玉県立嵐山史跡の博物館の協力を得て、この足軽の着用した胴丸と陣笠を作成しました。

まず、黒い大きな厚紙に型紙を当て、切り取った鎧のパーツに千枚どおしで穴をあけます。そこに、あらかじめ用意したリボンや、組紐^{ひも}などを通して立体的に組み立てていきます。普段、千枚通しなどを使いられない

子どもたちも、胴丸の下につける草摺^{くさずり}や留め具が出来あがっていく頃には、器用に使いこなしていました。手作りコンパスで陣笠作りもなんのその、みんなきれいに作ることが出来ました。この講座では、千代田区文化財保護調査員4名がボランティアスタッフとして参加してくださいました。あるボランティアスタッフが、厚紙の余りで刀をつくってあげると、さあ大変。我も我もと、会場は小さな雑兵たちの合戦場になってしまいました。

当館では、今後も、こうしたものづくりを通じて、昔の生活や歴史への興味を深める活動を行っていきたいと思います。

(小山)



編集後記

平成26年は、千代田区文化財保護条例施行30周年にあたる年でした。文化財事務室では、記念展示として、「千代田の文化財で綴る 江戸・東京の歴史」展（平成26年7月）を開催しました。さらに平成27年1月30日からは、その第2弾として平成26年度特別展「千代田の坂と橋—江戸・東京の地形—」を開催します。これらの展示を通して、千代田区がこれまで行ってきた文化財保護の活動を知っていただくとともに、区内各所の文化財を身近に感じていただくことを目的としています。本展示を見たあと、ぜひ千代田区内の坂めぐり、橋めぐりにお出かけいただきたいと思います。（加藤）



都営地下鉄 ●三田線—「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 } 「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場 当施設に駐車場はございません。

開館時間 月～金 10:00～22:00
土 10:00～19:00
日・祝 10:00～17:00

※企画展・特別展の観覧時間は異なる場合があります。

休館日 毎月第3月曜日
年末年始
特別整理期間

文化財ニュース 第7号

発行日 平成27年1月30日

編集・発行 千代田区立日比谷図書文化館 文化財事務室
〒100-0012 東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
HP: <http://hibiyajp/bunkazai/index.html>
e-mail: rekimin@vesta.ocn.ne.jp

印刷 鈴企画印刷有限公司